

## 5. Choledocal cyst の胆道スキャンとその特徴

○伊藤 和夫 篠原 正裕  
古舘 正従  
(北大・放)

先天性総胆管のう腫と拡張症の10症例について、DIC, ERCP, Ultrasound ならびに CT 所見と比較し、胆道スキャンの有する特徴に関して報告した。

胆管のう腫の形態診断の重要な所見は、のう腫の存在と、のう腫内への胆汁流入を確認することである。CT 超音波画像は、のう腫存在の描出にはすぐれていた。しかし、のう腫内容物に関しては情報に乏しく、この点、DIC, ERCP, 胆道スキャンの方が確定的な診断情報を提供した。ERCP は、解剖学的把握がより容易であるが、年齢とのう腫の大きさに規制される傾向があった。その点、胆道スキャンは、年齢の規制はなく、特にのう腫サイズが大きければ大きいほど、診断的な価値を有していた。拡張症に関しては、DIC や ERCP の方が胆道スキャンよりは、より診断的価値を有していた。胆道スキャンは、胆汁通過を知ることのできる唯一の検査法として、のう腫内胆汁うっ滞の状態を把握するのにすぐれていた。

## 6. 肝転移部に $^{67}\text{Ga}$ 摂取を認めなかった悪性腫瘍の2症例

高橋貞一郎 久保田昌宏  
大久保 整  
(札幌大・放)  
佐藤 卓広 足立 謙蔵  
(同・婦)

著者らは  $^{99\text{m}}\text{Tc-Sn-colloid}$  hepatoscintigraphy にて欠損が認められた悪性腫瘍肝転移 19 cases につき、肝欠損部に  $^{67}\text{Ga}$  citrate の陽性像が得られるかいかにつき検討を行なった。

対照とした症例は、primary sites Lung 2, Breast 3, Gastrointestinal 7, Prostate 1, Ovary 1, Uterus 1, Other sites 4 の 19 cases で、このうち婦人科

悪性腫瘍 Ovary 1, Uterus 1 の 2 cases 以外は全症例肝欠損部に  $^{67}\text{Ga}$  citrate の陽性像を認めた。

また肝転移部位の  $^{67}\text{Ga}$  citrate 摂取は一般に primary site および他転移部位に比較して高いことも認められた。

今回著者らは、scintigraph 上  $^{67}\text{Ga}$  citrate の集積を認めなかった婦人科悪性腫瘍 choriocarcinoma of l. ovary, Endolymphatic stromal myosia of utereess の2症例に注目し、両症例につき臨床的考察も加えて検討したので報告する。

## 7. 耳下腺疾患のガリウムスキャンの検討

小川 敏英 高橋 睦正  
玉川 芳春 西口 弘恭  
有井 穂積 新藤 雅章  
黒川 博之 高橋 栄治  
宮内 孝治 斎藤 裕  
(秋田大・放)

われわれは、耳下腺腫瘍、腫脹の臨床診断のもとにガリウムスキャンを施行し、その後手術などにて組織診断を確認し得た27症例に関して、ガリウムスキャンと組織診断との相関について検討した。また、同時に施行した  $^{99\text{m}}\text{TcO}_4^-$  による唾液腺シンチ、さらには CT スキャンに関しても若干の考察を加えた。

組織診断の内訳は、耳下腺腫瘍が19例で、そのうち良性腫瘍が13例、悪性腫瘍は6例であった。なお炎症は3例、正常耳下腺組織が1例、そのほか耳下腺以外のものは4例であった。

耳下腺へのガリウムの集積の評価は、正常でも集積を認める鼻粘膜と比較して、相対的に、(-), (+1), (+2), (+3) の4段階の grading を行なった。27症例の結果は、良性腫瘍の13例のうちガリウムの集積を示さなかったのは4例で、残りの9例は集積を示し、うち2例は(+3)の高度集積を示した。また、悪性腫瘍の6例のうち、集積を示したのは3例であった。以上のごとく、腫瘍の悪性、良性和ガリウムの集積には相関をみとめなかった。

次に唾液腺シンチでは、その集積の pattern を normal, enlargement, defect, decreased uptake, non-visualized の5型に分類し、腫瘍の悪性、良性との相関を検討したところ、症例数は少ないが悪性腫瘍では、decreased uptake, non-visualized の所見を示す傾向にあり、また、良性腫瘍では、normal, defect の所見を示す傾向にあるように思われる。

また、CT スキャンでは、第一世代 ACTA スキャンによるものであるが、耳下腺の腫脹、石灰化などの所見は認められるものの、CT 上悪性、良性の鑑別は困難であった。現在、われわれは、第三世代 GECT/T8800 を用いて、頭頸部腫瘍の診断にも役立っているが、耳下腺疾患に関しても、造影剤の大量早期点滴法を併用するなどの工夫によって、より詳細な検討ができるのではないかと期待している。

## 8. 肝腫瘍に対するタリウム 201 の集積の検討

高橋 弘

(磐城共立・放)

肝腫瘍の質的イメージ診断法として、 $^{201}\text{Tl}$ -chloride を使用したので、その結果をここに報告する。

検討の対象は、昭和54年5月から8月まで、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -phytate 肝シンチグラムで、cold lesion を示した30例で、その内訳は肝細胞癌8例（肝硬変合併7例、非合併1例）、肝硬変偽腫瘍16例、転移性肝癌5例（胃癌4例、子宮癌1例）、肝のう胞症1例であった。

シンチグラムは  $^{201}\text{Tl}$ -chloride 2 mCi を静注し、5分後から scanning し、正面、背面、両側面像を撮影した。また、スキャンナーのエネルギーウィンドウは、k-X 線を利用する場合は、65~82 keV とし、 $\gamma$  線の場合は126~176 keV とした。

最初の6例は、k-X 線によったが、肝細胞癌の1例で、k-X 線では陽性像がえられず、 $\gamma$  線の利用で陽性像がえられた症例を経験してからは、 $\gamma$

線に合わせたエネルギーウィンドウとした。病巣部への  $^{201}\text{Tl}$ -chloride の集積が、その周囲組織より強い摂取を示したものを陽性、その他を陰性とする、肝細胞癌では8例中6例に陽性、肝硬変偽腫瘍では16例中15例が陰性、転移性肝癌5例、胆のう胞症1例はすべて陰性であった。

以上の結果から、 $^{201}\text{Tl}$ -chloride によると、肝腫瘍例から肝細胞癌例の鑑別率は高いように思われた。Cox は肝癌の1例、実験的に Rat の Rhabdomyosarcoma に  $^{201}\text{Tl}$ -chloride の集積を報告し、久田は肝細胞癌7例中5例に、中島は肝細胞癌の5例すべてに陽性像がえられたと報告し、 $^{201}\text{Tl}$ -chloride 集積機序を細胞膜の透過性の亢進と vascularity と推定している。しかし、伊藤は、 $^{201}\text{Tl}$ -chloride は K 代謝と同じと報告し、腫瘍親和性に否定的であるが、今回のわれわれの検討では、本例の肝細胞癌への腫瘍親和性を全く否定できず、臨床上、 $^{75}\text{Se}$ -セレン ナチオン肝シンチグラムと比較し、被曝線量の軽減がえられるとの文献的報告、また、 $^{67}\text{Ga}$ -citrate に比し、使用上の煩雑さが少ないなどを考慮すれば、手軽に利用できるため、今後さらに、症例を重ねて検討したいと考えている。

## 9. 振動障害者の骨変化における核医学的イメージングの観察

木田 利之 鈴木 晃

小林 克子 加藤 和夫

(福島医大・放)

成田 滋

(成田・内)

研究目的：振動障害者は振動に関係の深い部位すなわち、頸椎および上肢の諸関節にいろいろな骨変化をきたすことが知られている。振動障害者に全身骨シンチグラフィーを行ない、その骨シンチグラム所見および診断的意義について検討した結果を報告する。

対象、方法：対象は某製鋼工場の振動工具使用